
とある俺等の禁書目録

ハッスル000

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある俺等の禁書目録

【Nコード】

N6668X

【作者名】

ハッスル000

【あらすじ】

「俺等は確かに弱い。だけど…みんなで頑張ればきっと…俺等は最強だ」

これはとある不幸な少年とその仲間達の絆の物語…

少年は決して…孤独ひろじゃなかった…

- ・蟹紳士：『何このあらすじWWW』
- ・乱舞厨：『シリアスのシの字も無いような作品なのになWWW何劇場予告風なあらすじ目指そうとしてんのWWW』
- ・M：『確かにこれは無いな…絆ってWWW』
- ・青汁：『そうかな？俺は好きだなこう言うキャッチコピー』
- ・夏男：『それは青汁だけだな』
- ・執事：『まったくシリアスなんて書く技量も持ち合わせてない駄作者の分際でシリアスなあらすじにしてみたいなんて烏滸がましいにもほどがあります』
- ・ヨツシー：『酷い！あまりに毒を吐きすぎている！』
- ・セイバー：『落ち着けよみんな。こんなに無駄にあらすじ長くしてどうするんだよ』
- ・wintar：『あまいですよセイバー氏！本編から隔離されたあらすじというまさに閉鎖空間内なら自重すべきメタ発言も許容されるのです！』
- ・博士：『良いのかそれ！かなりギリギリな発言だぞ！』
- ・蟹紳士：『いける！』
- ・乱舞厨：『いける！』
- ・執事：『いける！』
- ・wintar：『いける！』
- ・三段活用：『ハモってんじゃねーよ！』
- ・軍曹：『しかし本編でやるよりマジじゃね？とマジレス』
- ・ピアス：『ならまずは作者はキャラ崩壊から自重すべきやったな』
- ・ラビット：『まあまあみんな。作者も頑張ってるんだ。応援してあげないか』
- ・M：『ぐはあ！』
- ・ヨツシー：『癒される…』
- ・蟹紳士：『自分の穢れが見える（　　）』

・三段活用『つーが長すぎだいい加減切るぞ。んじゃ本編どつぞ』

貴方はログインしますか？

クロスキャラ紹介（必読）（前書き）

どうもログインしていただき感激です。

そしてログインしていただいた皆さんにこのSSを読んでいただく際の注意を何点か挙げさせて頂きます。

- ・この作品は複数作品のクロスオーバーです。
- ・異世界移行系ではございません。あくまでこの世界の人物達として登場します。なので過去がかなり違います。
- ・キャラ崩壊してます。
- ・チート？何それ美味しいの？
- ・ストーリーは禁書スタートではなく、超電磁砲軸から始まります。
- ・当麻、土御門、青髪ピアス、吹寄の学年が1つくり上がっています。つまり高校2年生で御坂美琴とは3つ歳が離れています。（ストーリー展開上必要不可欠でしたm(_____)m)
- ・上琴要素：と言いますかこの作品の推しカップは上琴です。しかし御坂美琴優遇はしません。全女性キャラ出番有り。
- ・ストーリーは原作流れ
- ・独自解釈、オリ展開、オリ能力が有ります。
- ・チャット形式の会話が多数有ります。
- ・ヒロインは上条さん独占じゃ有りません。

以上のことが許せない方は速やかにログアウトすることをお勧めします。

クロスキャラ紹介（必読）

主要クロスキャラ紹介

不動遊星 16歳

好きなこと&もの・幼女、貧乳、バイク、ミルク
嫌いなもの&もの・巨乳、年上、コーヒー
趣味・バイク走行、幼女探索、ハッキング
特技・バイクテク、幼女センサー

所属・ジャツジメント

能力名・スタータストミラージユ仮想立体

能力概要・立体映像を映し出す能力。立体映像なので触れることは出来ない。映し出す立体が大きく、細くなるほど演算が高度になる。LEVEL2

キャラ概要・自称紳士のロリコン。ロリ以外を拒み、ロリの総てを愛する強者。エロゲはロリキャラ以外は攻略しない徹底ぶりである。人生のスローガンは『でかけりや良いつてもものじゃ無い』。ジャツジメントに志願した理由は学園都市を好き勝手に動けるため。権力は嫌いだ自分が振るう場合はモウマンタイ。しかし仕事は真面目？で小学校密集地域のパトロールを自ら進んで勝手に行く。チャットのパンドルネームは蟹紳士。

刹那・F・セイエイ（本名ソラン・イブラヒム） 16歳

好きなこと&もの・ゲーム、アニメ、プラモ、年上、巨乳
嫌いなこと&もの・鬱ゲー、ゴージャ、BL

趣味・プラモ製作、チャット

特技・剣道、ゲーム機の修理

所属無し

メンタル・チャッター
能力名・脳内対話

能力概要・自分を中心に半径10メートル圏内の人物を選択（複数可）し、脳内でチャットを開く能力。普段は専らカンニングや授業中の雑談に使用する。便利そうに見えるが普通に喋った方が早いためあまり使えない。LEVEL2

キャラ概要・上条達の愛用するチャット（俺らの集会所）の管理人年上を好む。幼女に興味は湧かないが可愛いものとは認識している。これまた生粋の変態（紳士）で、クラスの誰よりもゲームが強い（自称）。エロゲの保有数はクラス1！剣の心得を持っており、身体能力は高い。フラグ管理の鬼で、自分の建てた死亡フラグは自分で折ると豪語する。そして相手の死亡フラグにかなり敏感で死亡フラグで勝利を確信して大抵痛い目に会う。尚、刹那と言う名前はソラが自ら付けた偽名。名称理由はカッコいい（中2病）から！チャットのバンドルネームは乱舞厨。

武藤カズキ 16歳

好きなこと&もの・青汁、熱血、年上のお姉さんキャラ（スレンダーだとGJ！！）

嫌いなこと&もの・冷たい視線、ホラー映画、無視されること

趣味・トレーニング、カッコいいポーズの研究&練習

特技・青汁イツキ飲み、ポーズを極めたまま走る、通信空手拳！

所属無し

能力名・LEVEL0

能力概要・不明

キャラ概要・クラス1の熱血野郎。ギリギリな状況ほど熱く燃えポーズを極める。青汁が全てを解決すると信じて疑わない。ゲームは格ゲーが好きだがうまくはない。スレンダータイプのお姉さんキャラがストライク！！通信空手と槍が得意でクラスの鉄砲玉的存在。口癖は「何を隠そう俺は 的天才だああああ！！」。何かと行動

がオーバーアクションなのはご愛嬌。バンドルネームは青汁

椎名真冬 16歳

好きなこと&もの・BL、ゲーム、同人誌

嫌いなこと&もの・暑苦しいもの、無節操な人、オタクをバカにする発言

趣味・攻略Wiki更新、チャット

特技・脳内変換、モンハン

所属無し

能力名・物体転移
テレポーター

能力概要・無機物であれば何でも設定した座標に転送できる。しかし物体の質量が大きいほど時間が掛かり、真冬本人の身長の倍以上の物はレポート出来ない。無機物に限るため基本はバックアップ担当。LEVEL3

キャラ概要・クラスの清涼剂的ポジションながら、その実はクラスでも上位に食い込む変人。BLが大好きでクラスの友情を虎視眈々と狙っている。ゲームの腕は凄まじくモンハンに関してはクラス1の実力者。頭はクラスのNo.1。基本ヒツキーなので運動は大の苦手。バンドルネームはwinter

神原駿河 16歳

好きなこと&もの・BL、GL、BL小説、走ること、罵られること、エロいこと

嫌いなこと&もの・無い！（変態故に最強）

趣味・走ること、変態談義BL小説を読み漁ること、

特技・走ること、バスケ、ジャンプ

所属無し

能力名・世界掌握
レインデビル

能力概要・右手の掌から肘まで筋力の増加。推定3000〜4000キ
口の握力LEVEL2
キャラ概要・BL好きのDM百合。あまりに強烈なキャラ性にクラ
スの王者に君臨する変態。別名最強の変態。走ることに關しては他
の追隨を許さない。掃除が極端に苦手でもいつも散らかっている。最
近年下に萌えを開拓したらしく、常盤台中学の周りに目撃証言が増
えた。ハンドルネームはM

吉井明久 16歳

好きなこと&もの・ゲーム、栄養価の高い食事、小萌先生の補習
嫌いなこと&もの・勉強、鉄人の補習

趣味・レア物のエロ本発掘

特技・節約

所属無し

能力名・理想郷風^{アガルタ}

能力概要・下から突き上げ気味の風を起こす能力。風力は精々スカ
ートを翻し、理想郷を覗かずことが出来る。射程は30メートルと
でかい。LEVEL1

キャラ概要・クラスで一番バカで残念な頭を持つバカが服を着たと
賞されるほどのバカ。仕送りをゲームに変える力で家計は火の車に
なってしまうが後悔はない。愛読の参考書は『エッチなメイドの
いやらしいご奉仕』。あらゆる分野に対応する男で守備範囲もなか
なか広い。ハンドルネームはヨッシー

ラウラ・ボーデヴィツヒ 16歳

好きなこと&もの・みんなと過ごす時間、風呂上がりのコーヒート牛
乳、みんなが笑っている時

嫌いなこと&もの・みんなが笑っていない時、運動後の炭酸飲料、

パジャマ

趣味・眼帯収集、関節技、景品のポイント集め

特技・コマンドサンボ、ルーレット、クレーンゲーム

所属無し

能力名・波長共振^{エコー・マザー}

能力概要・一定距離内部の震動を感知し、識別する能力。 L E V E

L 2

キャラ概要・凄まじく純粋な女の子、俗世と言う湯船に浸からず生きて来た軍人。しかし訳合つて軍から追われるはめになり高校になる時学園都市で教師をしている恩師の織村千冬を頼つてやって来た。心はピュアで汚れを知らず、みんなから歪んだ知識を勝手に学習し、それをさらに曲解させた答えに行き着きそれを疑うことなく実行する。更にはみんなが恥ずかしくて言えない様なことも平気で口に出す等天然気質がかなり高い。ある意味主役らしい女の子。しかし元軍人なだけあつてコマンドサンボを会得しており、身体能力は高い。ハンドルネームはラビット。

衛宮士郎 16歳

好きなこと&もの・アルトリア、家事、料理、人の役に立つこと

嫌いなこと&もの・食べ残し、激辛料理

趣味・料理、アルトリアといちゃつくこと

特技・弓、家事全般、創作料理

所属・花屋『ベリーフラワーズ』バイト、酒屋『荒波』バイト、喫

茶店『赤い糸』バイト、掃除のバイト、新聞配達、 e t c

能力名・ L E V E L O

能力概要・不明

キャラ概要・いつもいつも恋人のアルトリアといちゃつくのを第一に行動を起こす惣気野郎。みんなのストレスの原因であると同時に困った時に頼りになるみんなの正義の味方。宿題を忘れたなら先ず

は彼に土下座してノートを見せて貰おう。大概貸し出されているが……。恋人のアルトリアとは同棲している。収入源はバイト、通称バイト戦士と呼ばれる人間だ。そして弓の名手でもあり、百発百中の腕前を持つ。ハンドルネームはセイバー

エドワード・エルリック 16歳

好きなこと&もの・化学、数学、髑髏模様、捻れた角のデザイン、機械、人体研究、雑学

嫌いなこと&もの・チビ呼ばわりされること、

趣味・実験、医学の本の読書、かっこいいアクセサリー収集

特技・暗算、一度覚えたことはなかなか忘れない、

所属無し

能力名・錬金土器
フルメタルアルケミスト

能力概要・鉄分の含まれた物質の形態変化。発動条件は両手で5秒以上触れること、発動させる前の両手を合わせる動作は演算を安定させるための予備動作。LEVEL3

キャラ概要・医学的知識の高い博識野郎。雑学にも詳しく、機械、化学等の知識が豊富だが興味の無いものにはとことん不真面目になるため成績はあまりよくない。チビ呼ばわりされるのが大嫌いでかなりキレやすい。その姿はオーガのオーラーを纏う。好みタイプは金髪のシスターキャラが大好き。ハンドルネームは博士

綾崎ハヤテ 16歳

好きなこと&もの・お嬢様（保護者的視点）、お金

嫌いなこと&もの・BL、女装

趣味・筋トレ、掃除、自転車

特技・自転車で車に追い付くこと、徹夜

所属・執事喫茶『三千院』

能力名・LEVEL0

能力概要・不明

キヤラ概要・執事喫茶で身に付けた数々の能力を保持する執事（仮）。住まいは世話になってる執事喫茶の屋根裏部屋。寮に入らなかつたのは移動時間の短縮のため。趣味が筋トレなので力は強く、自転車限定で凄まじい脚力を発揮する。かなり腹黒で笑顔の裏には修羅が住み着いている。そして意外に毒舌で神原が喜んだり、明久を自殺寸前まで叩き落としたり、カズキを青汁卒業一步手前までその口と暴力で追い詰めた。しかし実は打たれ弱い部分があり、織村千冬や鉄人は天敵、主な戦闘方法は蹴りでかなり速い。ハンドルネームは執事

織斑一夏 16歳

好きなこと&もの・千冬姉（重度のシスコン）、姉萌え系のエロ本、和食

嫌いなこと&もの・中途半端にエロイエロ本、梨

趣味・千冬姉の世話、パズル、

特技・ハンググライダー、早着替え、布団の中で身支度を整えられる

能力名・^{フォトンサーチ}粒子警報

能力概要・粒子を周辺に分布し、地理などを把握したり、ばらまいた場所に人が現れたのを報せる。能力効力時間は24時間LEVEL2

キヤラ概要・記載した通り重度の姉萌えのシスコン。エロ本もその8割が姉萌え系の物で、よく千冬姉の世話をしに行く。成績は微妙で補習か補習無しかの中間ポイント。今は僅かに補習寄り。バックにはいつも愛用のマジックハンドが入っており、マジックハンドの扱いはかなりうまい。姉の為なら例え火の中水の中、あの子のスカートの中 え…ちよっ…まっ…ぎゃあああああ………ハンドルネームは夏男

用語集

・各能力名は全員が「当麻が『幻想殺し』なら、俺等もかつこいい名前付けようぜ!」と言う理由で彼らが勝手に付けた名前。よって実際は光子能力やら強化能力等の名前が有る。

・『俺達の集会所』。ソラン・イブラヒムが管理人を務めるチャット。ログインには特殊なパスワードが必要とされるため、ログイン出来るのは、上条当麻、土御門元春、青髪ピアス、不動遊星、ソラン・イブラヒム、武藤カズキ、神原駿河、椎名真冬、吉井明久、衛宮士郎、エドワード・エルリック、ラウラ・ボーデヴィツヒ、綾崎ハヤテ、織村一夏の合計14人のみである。この14人は常にここで情報を共有している。不動遊星はジャッジメントで得た情報を躊躇無しでばらす。後はエロゲの発売状況など情報で埋まっている。

・『ボルカニック遊星号』。不動遊星の愛車で様々なギミックが組み込まれた違法改造車。赤いペイントを基本に白のラインが3本走っている。アニメのとは違い形は普通のバイクである。勝手に仕掛けた盗聴機やカメラの画像を確認するため画面が取り付けられている。

・『アルトリア』。士郎の彼女でイギリス出身の美少女。かなりの大食漢で基本は何時もお腹が減っている。士郎とはどこまで行ったかはわからないが、恐らくこれまでに行っていることは容易に想像可能だ。士郎との出会いは不明だが、少なくとも士郎がみんなと知り合った後に学園都市で出会ったことと、15歳なのに学校には通っていないことは確かだ。

・『バイト戦士』。バイトを大量に掛け持ちして生計を立ててる人間の名称。

クロスキャラ紹介（必読）（後書き）

上条、土御門、青髪ピアスのハンドルネームは三段活用、軍曹、ピアスです。

この作品には拘りが有りまして、決して「俺のせいでみんなに迷惑はかけられない…」的な展開はありません。自分の弱さを互いに支え合って誰一人欠けることなくハッピーエンドを目指すというのがスローガンのssですので。

ではまた次回

プロローグ1 朝は遅刻と鬼教師との闘い！

ここは学園都市にある一般レベルのどこにでもありそうな高校。名を公立坂下高校。ありふれた名前である。

これはそんな学校の朝の一幕…

PM8:00 遅刻まで残り30分

一般生徒「おはようございます〜」

鉄人「うむ、おはよう諸君」

この時間になると登校する生徒の姿が目立ち始める時間だ。これより前の時間に来るのは余程酔狂な奴か、テスト前に『家じゃ集中出来ないwww』とか抜かす輩だ。

鉄人も気持ちよく挨拶を返していく。普段からキレてばかりな彼も挨拶は返すし、生徒想いなのだが如何せん行動が怖い。

鉄人「おはよう」

鉄人はまた挨拶を返すと時計を確認する。

PM:8:15

鉄人は人知れずため息を吐く。もう少しで遅刻になるこの時間帯こそこの学校の大変な時間帯なのだ。詳しく言えば問題児達の登校時間。

すると校門の前に一人の男が現れた。

その男はクセの強い黒髪にやや中東出身者特有の肌、身長はやや低く、腕にペタンコな鞆を抱えながら走ってきた。おかしな奇声を上げながら

「???「俺が新世界の…！」

「???「GODになる…！」

彼は全速力で駆け抜ける。

「???「はははWWWユニバー…S…！」

朝からハイテンションなことだ。鉄人は凄まじいスピードで鉄人の横を駆けぬけた生徒に叫んだ。

鉄人「イブラヒム。今日は遅刻しなかったな。これからもそれを心掛けるように」

刹那「鉄人！！俺の名前はソランじゃない。刹那DA！」

鉄人「いやイブラヒムだろ」

刹那「その名はとっくの昔に棄てた…俺は何者にも捕らえられない」

鉄人「さっさと行け」

刹那「ヘーイ」

刹那は大事そうに抱えた鞆を持ちながら学校に入っっていった。

鉄人はそれを見届けることなく挨拶を再開する。すると新たな刺客が現れた。

???「神原駿河必殺Bダツシュ!!!」

???「負けるか!燃え上がれ俺のパトス!!!」

???「速すぎだろてめーら!!!しかもカズキはポーズ極めてんのになんでそんな速いんだよ!!!」

先頭を走るのは整った顔立ちにスレンダー気味な体つきに鮮やかな黒髪を短く切り揃えた少女。次に走ってきたのは仮面ライダー1号の変身ポーズをとりながら駆けるがっしりとし身長もやや高く、後ろに爆発した様な黒髪の男子。その後ろを走ってくるのが平均身長より低い身長にやや茶髪の混ざった金髪を後ろで三つ編みにし、ピーン!と立ったアホ毛がトレードマークの男子だった。

???「私の…勝ちだぁぁぁぁぁ!!!」

???「やっぱり負けたぁぁぁ!!!」

???「結局俺がドンケツかよー!!!」

鉄人「神原、武藤、エルリック。今回はギリギリセーフだな」

エドワード「あたぼうよ！」

駿河「私達を侮ってもらっては困るぞ鉄人」

カズキ「遅刻で補習室行きは勘弁だしね」

鉄人「ならよし、これからも遅刻するなよ」

3人「りよ〜か〜い」

鉄人「（これは明日は遅刻だな…）」

鉄人は3人を見送ると再び正面を向く。

時刻は8：20。後5分で予鈴が鳴る時間だ。

すると

????「急いで下さい！遅刻しちゃいますよ！」

????「明日遅刻したく無いからタクシーになってくれ言ったのに忘れて寝坊したのはお前だろ！」

????「さっさと行くのですタクシー！真冬のお尻がジンジンしてきました」

????「ちくしょー！！！」

ママチャリで颯爽と現れた2人の陰、こいでいるのは短く無造作にカットされた赤髪にやや低いかと感じる程度の身長に体から苦労臭漂う男子に、体は一回り小さくストレートに切り揃えられた金髪に大きなリボンが特徴的な美少女だ。

鉄人「衛宮がこの時間とは珍しいな」

士郎「真冬の奴が寝坊したのですよ」

真冬「人の性にしますか！最低です！」

士郎「真実だからな！」

鉄人「まあ…程々にしておけ。これからはもっと早く来い」

士郎「はい…」

真冬「真冬に命令なんて鉄人も偉くなったものですね」

鉄人「椎名真冬は1ヶ月補習だな」

真冬「嘘嘘ですよ。もー、鉄人はジョークが上手いですね」

鉄人「（無視）さっさと教室に行け！」

士郎&真冬「「はぁーい」「」

鉄人は士郎と真冬を見送ると再び校門の前に立つ。

するとまた三人一組で走ってくる影があった。

「????」急がなきゃ鉄人の補習だろ！絶対遅刻できない！」

「????」補習ならいつも受けているのに何を嫌がる？」

「????」いいですかラウラさん。みんな受けたくて鉄人の補習なんて受けませんから」

「????」そういうわけだから急ぐぞ。もうすぐだ」

「????」鉄人の補習は分かりやすくいいと思うのだが。テスト対策にもなるし」

「????」違うのですよラウラさん。元から勉強何それWWWな僕らにはあれは拷問以外なんでもないんですよ」

鉄人「酷い言い草だな。綾崎、織斑」

一夏・ハヤテ「げっ!!」

ラウラ「おはようございます。鉄人28号さん」

鉄人「ボーデヴィツヒにまた変な知識を植え付けたの誰だ。貴様等か」

一夏「ギクウー! いやいや、違いますから。それは確か刹那あたりですよ」

ハヤテ「はい。僕らは鉄…西村先生を尊敬してますから」

ラウラ「え？さっきふたりがこう言ったらよ「…モゴ」」

ハヤテ「はははWWWラ…ラウラさん口に蚊が着いてますよ」

鉄人「綾崎はHR後に職員室に来るように」

ハヤテ「ウソダドコドーン」

一夏「（ギリギリセーフ。ギリギリセーフWWW）」

鉄人「後は織斑は織斑先生の所に行くように」

一夏「ノットセーフ！！」

鉄人「ボーデヴィツヒは早く教室に行け。遅刻になるぞ」

ラウラ「はい」

ハヤテ「なんでラウラさんには罰が無いんですか！！」

一夏「そうだそうだ！不公平だ！」

鉄人「理由はボーデヴィツヒだからだ」

2人「納得だ」

2人は爽やかな笑顔で納得し、颯爽と校舎に入る。ラウラもその後
に続く。

学校からキンコーン。カンコーン。とテンプレな音楽が響き渡る。

鉄人「ここから遅刻者だな…」

この時間はせめて担任が教室に入る前に教室に着き、さも自然に教室に入り込むために走っている連中になる。

そんな中を切り裂く様に一台のバイクが現れる。

真っ赤なヘルメットを被り、真っ赤なボディに速度を追求した大きなタイヤを持ったバイク。ヘルメットに付いたバイザーで隠れた目の下に黄色いマーカー（お手製）が走っている。

鉄人「不動！遅刻だぞ！！」

その男は鉄人の前に停車し、ヘルメットを脱ぐ。

遊星「ジャツジメントの仕事で遅れた。急いで教室に向かう」

鉄人「そうか。すこしここに居ろ。今からジャツジメント本部連絡を入れよう」

遊星「い…いやな鉄人、今ジャツジメントは忙しいんだ。こんなことで割ける時間なんて」

鉄人「はい、今日は非番…ここ最近サボりが発生していますか。情報ありがとうございます」

遊星「アクセルシンクロー…！！！！」

鉄人の声を聞いた遊星はアクセル一気に吹かせて駐輪場へ逃げるか
ように行こうとするが

鉄人「まあ待て不動」

遊星の逃亡はあえなく未遂に終わることになった。

遊星「マジサーセンwww猛省しています」

鉄人「そうかなら気持ちよく補習が受けられるな」

遊星「チクシヨーーー！！！！（涙）俺のパトロール時間が鉄人と
の補習に変わるなんてそ〜んなのは、い〜やDA！」

遊星は鉄人に首根っこを捕まり空中をぶらんぶらんしている

すると鉄人はニュータイプ顔負けの反射神経で鉄人の真横を潜ろう
とする陰を捕まえた。

???「?!?バカな完璧に気配は消していたはず」

鉄人「吉井か。貴様ごときが俺をすり抜けて行くなど不可能に決ま
っているだろう」

明久「くそー！遊星を囮にした二段構えの作戦だったのにー！」

遊星「明久貴様！俺を売ったな！」

明久「あっははは、遊星ならパトロールで遅くなるのは簡単に想像

できたよ。だからこそ遊星が鉄人に捕獲されてるのを見てチャンスだと突っ込んだのさ」

遊星「俺は…利用されていたに過ぎないのか…」

鉄人「茶番で気を惹こうとしても無駄だぞ」

明久・遊星「ですよね」

鉄人「さて、残りは上条だけ…貴様ら知ってるか？」

遊星「どうせいつもの不幸だろ」

明久「だよね〜。当麻だし」

俺は学校の正門前で捕獲されてしまった戦友達に黙祷を捧げつつ学校の防護ネットに手をかけたいた。

緑の捻れたネットは触って体重をかけただけで問答無用に俺の手に食い込んできた。漫画のキャラはよくこれを登れるな。正直かなり痛い。ギチギチ音がなるし落ちたらそれこそ俺の人生は奈落の底だな。そう言えばエドワードが前言ってたな。確か人間は死ぬと生きていた時の行いで天 人間 修羅 餓鬼 畜生 地獄に行くかが決まるとというのが仏教の考えらしい。もしこれが適用されるなら俺はどこらへんだ。天は望みすぎな気がするから人間あたりに生まれたい。その時は是非不幸の少ない人生を謳歌したい。

しかし現実逃避は終了のようだ。ただいま時刻は8:29。本令ま

で後60秒。中々エキサイティングだ！

当麻「男、上条当麻。一丁腹括るか…」

憂鬱だ：今朝だつて目覚まし時計が壊れてしまっていて、朝食を抜いてまで来たと言うのに道中道に迷った子供やサラリーマンのコンタクトレンズを探す羽目になったりしたら見事に遅刻だ。

当麻「不幸だ…」

???「そうかそれは残念だったな」

?「なんだこの野太い声。まったくこつちとざあんたなんかに構ってやる暇なんかないんだよ。」

当麻「まったくくすよ！あのゴリラ教師め。頭の中まで筋肉で構成されてるのかってんだよ」

???「そうかそうか…上条…」

ん？この声はどこかで聞いたことがある……ん？

当麻「て…てて…鉄人？」

鉄人「かみじょおおお！！」

当麻「ギヤアアア！！」

鉄人「覚悟は良いかあああ！！」

当麻「不幸だー!!」

これは彼らのもある一幕。

ブローグ1 朝は遅刻と鬼教師との闘い！（後書き）

感想、指摘ありましたら遠慮なくお願いします。

プロローグ2 楽しくて仕方無い毎日

陽射しは今日も絶好調らしい。しかしあなた様の下には貴方の溢れんばかりの輝きによって不幸になっている者達がいるのを知るべきだ。

- ・三段活用：『と、俺は思うのですよ』
- ・蟹紳士：『確かにこれは不幸だ：朝から鉄人に校長スピーチのダブルパンチは辛すぎる』
- ・執事：『耐えるしかないんですか…』
- ・乱舞厨：『ゲームしてえ…』

そう、今俺等は学生の学校時代の嫌な思い出ベスト5に入ると思われる校長の絶校長なスピーチを聞きたいなんて一切言っすらいのに聞かされている真っ最中だ。

校長「……………で…なにになに……………それから」

校長はなにかを呟いている。もしかしたら良い話かもしれないけど知ったことではない。

- ・M：『全裸待機だ』
- ・博士：『し、死ぬ…』
- ・蟹紳士：『死ぬな。生きる』
- ・セイバー：『あ、アルトリア…』
- ・軍曹：『おい、セイバーヤバイことになってないかにやー？』
- ・ラビット：『校長はどうやら学生時代にルービックキューブ片手に世界を目指したらしいぞ。すごいな！』
- ・ピアス：『この話きいとおったんかい！』

- ・ W i n t a r : 『 . . . 』
- ・ 乱舞厨 : 『 やけに W i n t a r 静かじゃね? 』
- ・ W i n t a r : 『 . . . s . . . o . . . s . . . (ガク) 』
- ・ 博士 : 『 おい、その引きこもり生きてんのか!? 死んだ扱いし
o s 出してぞ! 』
- ・ M : 『 失神している! とマジレス 』
- ・ 三段活用 : 『 それって不味くないですか . . . 』
- ・ 博士 : 『 最悪熱中症だぞ!! 先生呼べ! 』
- ・ W i n t a r : 『 ゲー . . . ム 』
- ・ 執事 : 『 よし、放置安定ですね 』
- ・ 夏男 : 『 賛成 』

しかし暑い。正直参った。降参しますからお天道様は引きこもって下さい。

校長「そして私は…番長を倒し…」

この校長のスピーチは最終的に校長武勇伝披露宴に代わる。この校長の目的は生徒を熱中症にすることに違いない。じっくり焼くタイプだ。

校長「以上です。みなさんまた1年頑張りましょう」

校長は満足そうな顔で壇上から降りていった。出来ればもう乗って欲しくない。マジで勘弁して下さい。

遊星「終わった…」

刹那「ああ、終わった…」

ハヤテ「だけど僕らの戦いは…」

3人「『これからだ!』」「『

当麻「打ち切り漫画か!?!…だけどこの後は…授業か…」

ラウラ以外全員「…」

ラウラ以外全員「めんどい!…」

ラウラ「みんな何を言っている。授業は楽しいぞ?」

カズキ「それはラウラだけだよ」

士郎「授業が楽しい、か……」

エド「俺も勘弁だな。鉄人や織斑先生の授業は特に勘弁して欲しい」

一夏「理解できないものが楽しいはずねーよ」

当麻「全くですよ。しかも鉄人と織斑先生の授業は刹那の能力使えないしな」

刹那「念話能力なのになんでバレるんだよ。目はつぶらくちやならないけど」

遊星「気配じゃね」

駿河「あの二人は化物だからな」

真冬「ぶー、ぶー」

ハヤテ「はあ……」

全員は各々感想を述べるとハヤテがみんなを代表してため息を吐いた。

大体この学校の教師は学校は対してでかくは無いくせして無駄に豪華だ。つーか特異的だと思う。

先ずは我らが担任のスーパー合法ロリの月詠小萌先生、そして現役バリバリのアンチスキルで「じゃん」が口癖の黄泉川愛穂先生。あの人の体育の時間は無駄に辛い。次は趣味がトライアスロンとトチ狂っていると思えず、更には人間とは思えない筋肉と筋肉を兼ね備えた鉄人こと西村宗一先生。次は黒一色に決めたスーツが誰よりも似合い、しかしその実は刹那が剣でタイムンを挑み、2分で刹那を泣いて土下座させる程の実力者だ、その後グラウンド100周を命じるなど鬼ぶりも健在だ。ブラコン気味な疑惑がかかっている織斑千冬先生。その他にも個性的なメンツが揃っている。学校の主役は生徒なのにここでは生徒なんて教師には勝てない。能力なんて通用しないし。勿論幻想殺しなんて通用するわけではない。

刹那「あー、急ごうぜ。このままじゃ100パー授業に遅刻しちゃう」

ハヤテ「ですね。次は現国ですから織村先生ですよ」

エド「んじゃ対話は無しか」

明久「織斑先生寝たら殺されるんだよね…寝れないよ」

真冬「ゲームも出来ませんし真冬に何をしろと！？プンプンなので
す」

士郎「真つ当に生きようぜ真冬……」

カズキ「まあ、それが真冬じゃないか士郎」

士郎「…だな…」

俺達は階段を登っていった。

鉄人「このようにベクトルには向きがあり……」

教室に響く鉄人のチョークの音。この音と共に聞こえるシャープペンで文字を書く音の二重奏はやる気のない者からしたら心地の良い子守唄に変わる。

そんな勉強が支配した世界（教室）で反旗を翻す存在がいた。

- ・乱舞厨：『えーりん！えーりん！』
- ・蟹紳士：『レミリアたん〜！萌え〜』
- ・夏男：『もこたんは俺の嫁！』
- ・軍曹：『フランたんはあはあ……』
- ・ヨツシー：『も〜み〜じ〜』
- ・M：『マリパチュはジャステイス！』
- ・ピアス：『霊夢たんの腋ペロペロ……』
- ・三段活用：『ゆかりんは渡さねー！！』

・wintar:『こーりん!こーりん!』
・セイバー:『アルトリア!』
・執事:『咲夜さんマジリスペクト』
・博士:『…何やってんだ…?』
・蟹紳士:『嫁論争。ニコニコ名物の』
・博士:『じゃなくて何やってんだよ!今日は対話無しじゃ無かつたのか!』
・乱舞厨:『我慢できませんでした。反省はしないマル』
・博士:『…刹那:目を開ける…目の前にえーりんが手招きしてるぞ』

刹那「マジで、(。(。ノ)」

鉄人「ハロー…」

………

刹那「おやすみなさい」

鉄人「イブラヒムー!!貴様また能力を使っていたな!!」

ぐわし!と言う擬音が聞こえそうな勢いで鉄人はその巨大な掌で刹那の頭を握り絞める。

刹那「ぎゃあああああ!?!?ギブギブ!ギブギブ!」

刹那はそのまま椅子から体が離れて空をばたついている。メシメシといった音が刹那の頭蓋から聞こえてくる。

鉄人「コイツの能力に参加していた奴は手を上げる!」

鉄人は刹那を持ったまま教室に対して、つか問題児集団の俺等に怒鳴り散らす。掌の中にいる刹那の頭から白い魂が出てきている。恐らく三途の川目指して歩いているのだろ。

「.....」

しかし自白なんて俺等がするはずなく全員一斉に目を反らす。

鉄人「悪魔でも白を切るつもりか...」

鉄人は掌の刹那の頭をぶらんぶらんさせながら俺等に鬼すら逃げ出しそうな瞳を向けていた。

すると突然一人の人間が席から立ち上がった。

ラウラ「鉄人先生。私が刹那に頼んで能力を使って話していました。私以外のみんなはみんな真面目に授業を受けていました」

チャットに参加していなかったラウラだった。

鉄人「ボーデヴィツヒ...貴様は...」

鉄人は困ったように頭をかく。それもそうだ。先ずラウラは基本授業が大好きなため授業をサボったり寝たりすることは無い。それに授業を全く受けずにチャットをしていたと言うラウラのノートは鉄人が口でしか言っていないことを一語一句間違えずにメモしてあった。こんなノートを作っている奴が授業を聞いていないなんて有り得ない。

ラウラ「だから刹那を離してくれませんか？」

つまりラウラは全く無関係にも関わらず俺達の身代わりになったのだ。アイツはみんなが笑顔でいるのが一番幸せだ。て、平気で言えてしまう奴だ。

遊星「鉄人！俺がチャットに参加していました。ラウラは参加していません」

駿河「うむ、罰は私達が受けるべきだな」

エド「だから止めるって言ったのによ」

明久「まあ、いつかはバレるよね」

ハヤテ「ラウラさんもそういうのはやらなくていいですよ。やってた僕らの自業自得なんですから」

当麻「因果応報なんですかね…」

だから俺達はラウラを守るために立ち上がろう。俺達はいつも一緒なんだからよ。ラウラ一人に任せるわけにはいかない。

俺を始めとしてチャットに参加した奴等はみんな残らず立ち上がった。

鉄人「貴様等は…全員で廊下に立ってる。イブラヒムにボーデヴィツヒもだ」

全員「はい」

俺達は仲良く全員廊下に出る。

俺達は仲間なんだ。誰かがピンチなら全員で全力で助けるし、俺がピンチなら全員が全力で助けてくれる。俺達は俺達にしか分からず伝わらない確かな絆で繋がっている。

ラウラ「みんな…ごめんなさい」

当麻「なにがだよ？」

ラウラ「その…こんなことするなと言われていたのに…」

カズキ「気にすることないよラウラ」

一夏「だな。これが俺達だろ」

真冬「そうですよ。水臭いです」

ラウラ「みんな…」

遊星「しかし鉄人の授業はやはり自重すべきか…」

遊星の言葉に全員の話題がそれに集中する。

エド「やっぱり刹那がLEVEL3あたりなんなねーと無理なんじゃないね」

士郎「確かに対話するには刹那が必要不可欠だしな」

刹那「まさかの責任転嫁！」

土御門「いや、お前のせいだにゃー」

駿河「刹那のせいだな」

ハヤテ「以外無いでしょ」

ピアス「ですよねー」

刹那「チクシヨー！！」

ははは。みんなで笑い声を上げて教室から鉄人に怒鳴られる。そんないつもどおりでどうしようもない下らない毎日が楽しくて仕方ない。

出来ればこんな日常がずっと続いて欲しい。

俺はそんなことを考えながらみんなと笑い合った。

ブローグ2 楽しくて仕方無い毎日(後書き)

次回あたりから超電磁砲が入ってきます。

第1話 A 新たな出会い（前書き）

冬休みに入ったぞ！

そして今回から話が進みます。

第1話 A 新たな出会い

とある木漏れ日の昼下がり。弁当を平らげて睡魔からのスイティーなお言葉との闘いが激化の一步に入る時間帯だ。そして言わずとされた我らが小萌学級スーパMONDAIZI達は、連日激しい闘いを征する為に意識と隔離された魔界まで睡魔神との激闘を繰り広げていた。

遊星「ZZZ」

カズキ「ZZZ」

明久「ZZZ」

刹那「ZZZ」

駿河「ZZZ」

一夏「ZZZ」

真冬「ZZZ」

エド「ZZZ」

ハヤテ「ZZZ」

当麻「ZZZ」

土御門「ZZZ」

ここに集いし勇者達はここ連日激戦に身を投じている。

ああ…なんと自分犠牲だろうか。一切の見返りを求めない彼等の丸まった背中ではまさに現代に出現した正義の味方のそれと同じ薫りを漂わせている。

そんなの間違ってる！

置いてきた仲間からの活が飛んだ。自己犠牲等間違っている。自己

を幸せに出来ない奴に未来はない。そんなことではいつか彼等は理想に溺れて溺死してしまう。だから正さなければならぬ。

先生はその小さな体を震わせながら泣いていた。それは悲しみに彩られた哀しき涙だった。

その哀しき雫を止めなければならない。だから彼等は戦場になど居らず、笑顔で顔を上げていて欲しかった。それは当然の願いなのだろう。下を向いて現実から目を背けても何も変わらない。

しかし、戦士は戻らなかった。否、戻る気など始めから有るわけが無い。彼の魂は既に覚悟を決めていたのだ。勝つまでこの道を歩き続けると。

悲しみも苦しみもその全てを内包し、その魂を魔界まで送り込んだのだ。

しかし、しかし、

小萌「起きてくださーい!!! (涙)」

いい加減このモノログ疲れたから止めます。あー、よく寝た。

そんな感じにいつも通りの授業を終えた俺達は、部活をしている奴も居ないからそのまま帰り支度をしていた。ちなみに駿河はバスケット部に入りたかつたらしいが、憧れの先輩が入ったこの学校を目指し

たらこの学校にはなんと女子のバスケット部は存在せず、体育館のロ―テーションに空きもなく。駿河はバスケットは自主練だけにして大学でバスケットを始めるらしい。まあ、アイツは普段から20キロを何セットか走っているみたいだから大丈夫だろ。

そんな補足をモノログ形式で埋めていたらいつの間にか全員揃っていたみたいだ。

ラウラ「みんな少し良いか？」

そんでいつも通り校門目指して走るわけでもなくだったら集団下校と洒落込んでいたら突然ラウラが口を開いた。

真冬「どうしたんですかラウラちゃん？」

カズキ「何か相談事？」

ラウラ「いや、まあ相談なんだが、実はな」

ふむふむ、いつも通りランニングをしていたラウラは男に囲まれた女子を発見、取り囲んでいた男のリーダ格の首を締めて、頸動脈を抑えながら、その男の両膝の関節を外して、更には肩の繋ぎ目を外し、ラストに仕上げとして意識を落とす、その体を持ち上げて威嚇したら全員雲の子を散らすように散っていったらしい。そして助けた女の子と仲良くなり、明日友達を紹介する約束をしたらしい。それで今日一緒に来てくれとのお願いだった。

なるほどなるほど。いい子だなラウラは。だけど今は

全員「その四肢の関節を外された人はどうした？」

ラウラ「ちゃんと入れておいたから平気だろう。まあ、どこで寝てるかは知らないがな」

士郎「投げたのか！？ 投げ飛ばしたのか！？」

ラウラ「いや、放っておいた。誰かが救急車でも呼ぶだろう」

あ、肘関節は外しておいたがな。と物騒極まりない事を呟くのは、我等がアイドルの純粹少女。

エド「ちよつと待て、肘は外してなかったぞ。いつ外した」

ラウラ「肩を入れてたら目についたから、ついでにぐりん。と回しておいた」

刹那「想像するのも嫌になる光景だな」

遊星「美少女にあらゆる関節を外される光景…」

真冬「真冬ならトラウマになり、夜眠れなくなりますよ」

明久「僕も食欲無くす自信があるよ」

一夏「黙祷しようかな」

駿河「それがいいかもしれんな…女の子を集団で囲んでた時点で死罪だが…」

カズキ「やり過ぎ…かな？」

みんな考えることは同じらしい。1人キョトンとしてるラウラを尻目にみんなで手を合わせて黙禱を捧げる。

すまん。名も知らぬ男A。

安らかに眠ってくれ。

当麻「ならその助けた子に会いに行くか。行ける奴拳手」

シユバア!!コンマ一秒で全員が天高く手を伸ばす。ついでに遊星は鼻を伸ばす。中学一年という情報にさつきからかなり興奮していたからな。その他の男陣もかなりの速さだ。普段から出会いの無い俺達は女子と会える、最高でお近づきになれると言うアリーナでブレイクダンスを踊っても構わないと思える超特安条件だ。行かない訳がない。……リア充の土郎は純粹に会いたいただけかもな…後で鼻の下伸ばしてた。ってアルトリアさんにガセ流そ。

ラウラ「なら早速行こう。第7学区のファミレスで待ち合わせているんだ」

ラウラは余程嬉しいのだろう。真冬の手を引いて走り出した。ただし自転車並みのスピードだが。

真冬「いやああああ!!ラウラちゃん!真冬の足摩れてます!!真冬死んじやいますよおお!!引きこもりの耐久力の低さは尋常じゃ無いんですよおお!! Help me!!」

ラウラ「待たせたら悪いから、早く行かなければ」

真冬「天国にですか！！へブンにですかああああ！！」

ラウラは元はドイツ軍で軍人だったらしく、階級はまさかの大佐。しかもコマンドサンボを習得していて、本人曰く「関節なら腕一本で外せる」らしい。それに筋力は女性なので男性より劣っているも、軸がしっかりしており筋トレを欠かしていないそのパフォーマンスはリタリーボディは真冬を引きずり回す程度造作も無い。因みに腕っぷしはうちのグループで断トツのトップだ。俺や明久なんかは、何が起きたか知ることなく意識を刈り取られるだろう。

カズキ「新しい友達が出来るかもしれないから嬉しいのだろうね」

エド「その被害は全てヒッキーに押し付けられてるがな」

明久「あれはあれで真冬ちゃんの運動になるんじゃない？普段から運動不足なんだし」

刹那「しかし、凄まじいスピードだな。人を引きずりながら走っているとは思えない」

駿河「私なら真冬を空中に浮かしながら走れるぞ」

ハヤテ「駿河さんの足にはニトログリセリンでも詰まってるんですか？」

駿河「いや、BLEエネルギーが補充されている」

士郎「BLEエネルギー！？」

当麻「世界に優しくないエネルギーナンバーワンは確定ですよ。それ」

一夏「絶対使いたくない。断言できる」

駿河「因みに供給方法は近くの男達の友情を愛に変換させて、そのストーリーを頭の中で展開するんだ！今日は『当麻×遊星』だ」

当麻&遊星「げっ！！」

駿河「普段なら冷静沈着キャラの遊星が攻めなのだが、今日は当麻攻めのストーリー展開を試してみた。明日には真冬と一緒に原稿に書いていく予定だ」

遊星「グギャアアアア！！」

エド「お、落ち着け遊星！傷は浅いぞ！」

明久「そうだよ！だから小学校に身投げしたら、ジャッジメントに捕まって、ジャッジメントクビだよ！」

遊星「離せええええええ！俺にロリエネルギーを供給させるおおおお！！当麻に抱かれるくらいなら、まだ二十歳過ぎのババア共に抱かれたが増したああああ！！」

士郎「そりゃ男より女の子のが良いのは当たり前だろ！だから帰ってこい！女の子とお近づきになれるチャンスを棒に振るのか！」

当麻「その幻想をぶち殺す。その幻想をぶち殺す。その幻想をぶち殺す。その幻想をぶち殺す。その幻想をぶち殺す。その幻想をぶち殺す。その幻想をぶち殺す。」

駿河はそう言う足に充電されたBLエネルギーを解放してロケット宜しくなスピードでラウラの後を着いていった。

エド「んじゃ、俺等は歩いてくか？歩いて30分掛かるか掛からないぐらいだろ」

士郎「その前に当麻と遊星を覚醒させないと。2人とも自衛本能で気を失っている」

そこには死んだ魚の様な雰囲気を漂わせながら意識を失っている当麻と遊星が居た。遊星はスパコン並の妄想力を持っているからな。さっきの駿河の攻撃をより鮮明に想像してしまったんだろ…。脳が壊れる前に意識を落とすことで精神の崩壊を防いだんだろう。当麻は自らをそげぶしてマインドクラッシュを防いだのだろう。どちらにしる語り部はもう無理だろ。

一夏「これは少し時間がかかりそうだぞ。完璧に落ちてる」

刹那「揺すつても起きん。正直、ダルい」

ハヤテ「まあ…あれはキツイですよね」

はあ…仕方がない。どうやら駿河と合流するには少し時間が掛かりそうだな。語り部は駿河に任せるか。

何！？モノローグが回ってきた。エドにパスした筈なのに！アイツ

めんどいから適当にパスしたな。モノローグって疲れるんだぞ。

まあ、回ってきたからには皆様には神原駿河特製！『イヤン。エツチなモノローグ』を御堪能して頂こう。文句なら私に語り部を任したエドに言うのだな。

では始めていこう。まずは状況を説明せねばな。ここで妙に長たらしく話しても読者は満足せんだろうからな。メリとハリが良い女！
神原駿河。

まあ、結論から語るなら無事ラウラに追い付くことは出来た。真冬はドナドナされたままだったがな。

そして今は第七学区のファミレス目指して走っている。真冬は白い透けた真冬が天空に続く階段を歩いていくのが見えたので、勿体無いが助けた。あのままではヒッキーの肉体は稼働限界を迎えてしまっただろう。現在進行形で私に担がれている。

ラウラ「後少しだ」

ラウラは曲がり角を曲がり、大きな道路に面した道に入る。ここら辺はダッシュで何回か来ているので平気だな。

私は私の前を走る笑顔の雪の少女を見る。

ラウラ・ボーデヴィツヒ。この少女に出会ったのは高校に上がって直ぐの事だった。私達の学校はあまりクラス替えでクラスを大きくは変えない特殊な環境な学校だった。担任は三年間一貫で担当教師も替わらない。校長の言い分は担任と生徒との絆を崩さないためと言う曖昧な回答だった。私達としてはクラス替えが少ないのは好都

合だったが、そして見事に全員同じクラスになれた私達はこの少女に出会った。そして右折左折有り、彼女とは友達になった。あの頃は凍てついていた表情も今では春の光を浴びて眩しい笑顔を覗かせている。この少女の笑顔を見る度に私達は…

駿河「辛気臭くなってしまったな…」

ラウラ「?どうした駿河？」

駿河「いや、これから会う子達がいかに可愛いか想像していたら変な気分になってしまったな」

ラウラ「そうか。なんともないなら良いが」

まったく、こんなの私のキャラじゃないのにな。つつい真面目な事を考えてしまっていた。これから可愛い年下の女の子に会うのだ。気分を上げていこう!

私はスピードを上げた。

第1話A 新たな出会い（後書き）

全員のパワーバランス

筋力

ハヤテ<カズキ<一夏<刹那<ラウラ<当麻&遊星<士郎<エド<
駿河<明久<真冬

知力

エド<真冬<遊星<駿河<士郎<ラウラ<当麻&刹那&カズキ&
夏<<明久

走力

駿河<ラウラ<カズキ&ハヤテ<刹那<当麻<一夏&明久&エド<
遊星<士郎<真冬

戦闘能力

ラウラ<ハヤテ<刹那<一夏<カズキ<士郎<エド&遊星<駿河<
明久<真冬

当麻は相手によって能力が変わるため無記入

戦闘方法

コマンドサンボ・ラウラ

複数剣・刹那

剣道・一夏

槍、空手・カズキ

弓・士郎

蹴り・ハヤテ

世界掌握・駿河

バイク・遊星

練金土器・エド

幻想殺し・当麻

テレポート・真冬

勘の動き・明久

第一話B ファミレス会談A（前書き）

書いてて場面を想像して気持ち悪くなりました。だって首絞められながら関節を…やば

第一話 B ファミレス会談 A

凄いな…

私は目の前で繰り広げられる解体ショーをエトセトラ気分で眺めてそんな感想以外出てこなかった。その雪を纏った少女の力は素人の私にも分かるほど確かなものだった。

私が反応する前に目の前の能力者の関節は絶対曲がらない方向に、暴走した方位磁石を思わせる程、歪に曲がり、震えていた。

その少女はその横に有ったもう一方の人間の脚の半ばを繋ぐ皿に手を掛けて、一切の抵抗無くその関節を軸に脚は閉じていくホツチキスを連想させ、その人の太股を蹴った。

男の人は喉を潰されながら絶叫を上げるが、絞まりに絞まりきった喉は嗚咽しか吐き出せなかった。いや、それと一緒に涎の滝は流れていた。

少女は次に肩を揉む様に肩に手を置いた。しかし、今までのショーを見ていた私と、解体中の男の人にはその綺麗な手は何に見えたのだろうか？見るものには女神の極め細かな救いかもしれないし、男の人には死神の手招きかもしれない。私には…スイッチだった。押したらきつとその肩は無惨にも外されるのだろうか。

あの手は少なくともお爺ちゃんのを揉む子供の暖かな手とは違うのだから。

そして、スイッチは見事に音を立てて押された。鳴った音はカチリ

では無く、ゴキリイと言う生理的に受け付けられない様な不気味なメロデーだった。

そのままスイッチを押し終えた指は離れ、隣の同じ形のスイッチを躊躇い無く一瞬で押し込んだ。その時のBGMはさつきとは違い、ググイ！と押したのが一瞬だったからか、音も比例し短かったが、受け付けられない音楽なのは変わり無かった。悲壮感はより濃かったかもしれない。

そして流れ出る涎がピークに足したとき、既にこれでもかとひん剥いていた真つ赤な線が幾つも張り巡らされた眼球が完全に白眼に変わり果てた瞬間、少女は静かに初めて口を開いた。

「貴様等もこうなりたいか？」

それを口火に情けなく散っていく不良達。ある人は腰が抜けてしまっていたらだろうか？地面を這いつくばりながらじたばたしながら仲間を追い掛ける。

私は恐怖から来る金縛りにあい身動きが取れなかった。私の短い3年間の人生最大の恐怖が私の行動を縛る。目の前に転がるどうみても死体にしか見えない男の姿は下手なホラー映画の殺戮シーンより明確な恐怖を私に与えている。

その元凶の少女は男達が散ったのを確認すると、私の方を向いた。黒い明らかにファッションの類いでは無い眼帯に真つ赤な瞳が私を捕えた。

改めて見た少女の容姿はまるで人形の様だ。雪の結晶の様な白銀の風に揺れる柔らかな髪に、整った可愛らしい容姿に鋭い真つ赤な瞳と黒い眼帯は実に違和感を覚えさせない程、似合っていた。そして

全身から惜しむこと無く溢れている出ている凜々しい雰囲気は彼女が強いのだと雄弁に語っていた。正直さっきの光景を見ていなければ私では強いかなんて分からないだろうけど。

その少女の容姿に見とれていたら、少女はいつの間にか私の真つ正面に立っていた。そして心配そうに私の顔を覗き込んでいた。

「怪我は無いか？」

私は呆然とした。そりゃ凄いやほど呆然とした。何だつてそこにはさつきまでの凜々しい少女は居らず、変わりに私となんら変わり無い少女が居たのだから。雰囲気が違うのだ。さつきまでの狩人の様なプレッシャーは無く、私より低い背丈が相まってか、私より弱いだの女の子のようだ。

「は、はい。お陰で大丈夫です」

「そうか！それなら良いんだ」

少女は花が咲き乱れそうなとびつきりの笑顔を浮かべていた。本気で私を心配してくれていたらしい。

私はその笑顔にすっかり肩透かしを喰らっていた。さつきまで感じていた恐怖はすっかり遠く、彼方まで吹っ飛んでいた。

「あの…助けて貰ってすいません。このお礼は」

すると少女は掌を私につきだした。それは拒否の現れによく使う形だった。

「君が無事なら私は何も要らないぞ。なんせ一番重要なのは君が怪我をしていないかいなかなんだ」

「そんな…悪いですよ。何かお礼をさせて下さいよ」

私は引き下がらなかった。この少女は私を助けてくれたのは確かなことなんだから私はそのお礼をしないといけないと使命感を帯びていた。

少女は一頻り悩むと、そうだ。と手を叩いた。

「私とお話をしてくれないか。私は今一人で淋しかったのだ」

少女は何故かエツヘンと小さな発達途上の貧相な胸を張って威張っている。

「えっと…それってどういう…」

「むっ、知らんのか？今巷で有名なガールズトークと呼ばれるものをしたいのだ」

「ガールズトークですか？それって…」

今しているこの会話も部類上はガールズトークに部類されるんじゃない？

私は喉まで顔を出した言葉を呑み込む。何故かって？そこには期待に胸を膨らました純粹無垢な笑顔を浮かべる女の子が居たからだ。

裏切れない。私にはそんな勇氣は無かった。

「分かりました。ガールズトークですね。私、ガールズトーク得意なんですよ！」

大見栄きってしまう私はバカな子なのかな？ガールズトークが得意って只の口達者な女の子なんじゃ…

「おお！プロなのか！プロフェッショナルなのか！！私にガールズトークを教えてください！」

ガールズトークのプロフェッショナルってなんなの！？教えてください！
さい誰か！

駄目だ…引き返せない…。やるしかない…

「えええつと…まずは自己紹介からですね。ガールズトークは名前
でお互いを呼び合うことから始めるんです」

「分かった。私はラウラ・ボーデヴィツヒ。生まれはドイツ。学年
は高校2年生だ」

「えっ！？高校生なんですか!?!」

「そ、そうだが…」

えっ！だってこんなに身長低いからってつきり同級生ぐらいかなと考
えていました私。

「すみません。少し驚いてしまいました。えーと…ラウラさん」

ラウラ「さん等着けなくて大丈夫だぞ。ガールズトークは対等な関

係が第1と聞くからな。えーと…君の名前は？」

「あ、すみません。私は佐天涙子です。生まれは日本で、今年で中学生になりました」

ラウラ「佐天涙子か…良い名前だな。うん。涙子は良い奴だな！」

涙子「良い名前って／＼／＼…ありがとうございます……」

あー、顔が赤くなってるのが分かるよ。こんなこと言われるの初めてじゃ無いかな？

ラウラ「では涙子。ガールズトークを始めよう。あ、勿論歩きながらな。私には涙子を無事に家まで送り届ける義務があるのだ」

どうやら私は本日限りの最強のボディガードを得たみたいですよ
母さん。

ラウラ「涙子 はやくはやく」

なんだろう…私、自信持つて言えるよ。ラウラさんがスカート履いてたつて私は最早特技まで昇華したスカート捲りをしないって…誓えるよ初春。

涙子「なら自慢の友達の話しでもしませんか？近況話みたいな感じ
です」

私が話題を振るとラウラさんは待ってましたと言わんばかりに胸を張っていた。

ラウラ「自慢の友達なら私にはいっぱいいるぞ！みんな優しくてな
！」

どうやら相当大好きな友達みたいだ。ラウラさんの表情がそれを雄
弁と語っていた。

涙子「ならラウラさんの友達について話しましょうか」

ラウラ「…良いのか？私ばかり話すことになるが…涙子にはつまら
んかもしれないぞ」

涙子「そんなこと無いですよ。ラウラさんの顔を見ればどれだけラ
ウラさんがその人達を慕っているかぐらい解りますよ」

ラウラ「なら私の自慢の友達を紹介しよう！まずは誰からかな…」

涙子「誰からって、一人じゃないんですか？」

ラウラ「いや、私の友達は13人いるぞ。みんな私の大切な友達だ」

涙子「なるほど、分かりました。なら全員聞かせてください」

ラウラ「そうか！なら先ずは…駿河について話そう。駿河は凄く足
が速いんだ！毎日10キロを5〜6セット走っているんだ」

涙子「10キロを5〜6セット！？どんだけ速いんですか！？」

ラウラ「私達の中でも走力ではずば抜けているぞ。それにジャンプ
力も凄いのだ！なんと170センチ以上の背丈の一夏をひとつ飛び
したのでからな」

涙子「170センチ以上を飛び越えたんですか！？どんな脚力して
んですか！？」

ラウラ「本人曰く「BLEエネルギーの力だ」と言っていたのだから、
BLEとはなんなのかをまったく教えてくれんのだ」

あー、BLEって…やっぱりボーイズラブの略だよな…。つまり駿河
さんは腐女子ってことだよな…。たぶんBLEの事を教えないのはラ
ウラさんの教育上良くないからみんなが遮断してるんだよな。

涙子「あんまり気にしない方が良いでしょう。いつか教えてくれます
よ」

ラウラ「そうか！なら私は待つぞ」

涙子「それが良いでしょう。だから駿河さんが教えてくれるまで調べ
たりしたらいけませんよ」

ラウラ「うん。解った」

涙子「良い子ですよ」

私はラウラさんの頭を撫でた。その銀色の髪は想像より柔らかくて、
天使の髪ってこんななんだろうな。と考えてしまうほど滑らかで
私の手に絡まった。

ラウラ「えへへ／／／」

あ、そうか。解ったよ初春。ラウラさんの髪を天使の髪に例えたけ

ど違うね。ラウラさんは天使なんだ。だってこんなに私の心を満たしてくれるし、なによりこんな綺麗な笑顔を見たこと無いもん。天使以外有り得ないよ。

ラウラ「…はっ!？」

しばらくラウラさんを撫でていると、ラウラさんは顔を真っ赤にして私から離れた。もっと撫でたかったな…

ラウラ「足が止まってしまっていたな。急がなければ遅くなってしまうぞ」

ラウラさんは真っ赤になった顔を隠すように歩き出した。そんな仕事も可愛らしい。きっと駿河さんや友達も可愛がっているんだろうな。

涙子「なら次は別に人について話しましょうよ。次は誰ですか？」

ラウラ「むー、そうだな…なら遊星なんかどうだろう。アイツはジャッジメントに入っているな」

涙子「ジャッジメントですか。実は私の親友もジャッジメントなんですよ」

ラウラ「なんと!涙子の親友は凄いな。しかし遊星も負けてないぞ!遊星はジャッジメントでも偉いらしくてな。ゲームの発売日とゲームをした日には休みが貰えるらしい」

涙子「いや!?!なんかおかしくありませんか!？」

それってSABOR Iじゃないですか？しかも初春より堂々とサボってるよ。猛者だよ確実に。」

ラウラ「後、遊星はバイクの運転が上手いのだ。遊星に運転テクで敵う奴はいないぞ」

涙子「バイクですか？私みたいな中学生には夢みたいな乗り物ですね」

ラウラ「それでな　それでな　」

涙子「はい　」

私とラウラさんは時間を忘れるくらい夢中でガールズトークをして歩いた。

そして楽しい時間は直ぐに経つもので、気付いたら私達は寮に着いてしまっていた。

ラウラ「涙子もこれからは気を付けるのだぞ。夜中はただでさえ危ないのだからな」

涙子「ほんとありがとうございます。ラウラさんも気を付けて下さいね」

ラウラ「ああ、ではな涙子。ガールズトーク楽しかったぞ」

ラウラさんは寮を離れようとしたが私はこのままラウラさんと離れ

たくなかった。ラウラさんの友達の話だってまだ半分終わってないのに。

涙子「あの…ラウラさん？」

ラウラ「どうしたのだ涙子？」

涙子「明日…私の友達を紹介します。ラウラさんも友達紹介してくれませか？私会ってみたいです…ラウラさんとももっと仲良くになりたいです！」

顔が赤くなってるのは解ってるけどここで引くわけにはいかない。

ラウラ「・・・」

涙子「…どうですか？」

ラウラ「…うん！私も涙子ともっと仲良くなって、友達になりたいぞ」

涙子「と言う訳で私とラウラさんは友達になって、これから友達紹介をするってわけなんですよ」

ここは第7学区のファミレス。私は友達の佐天涙子に呼ばれて来ていた。

御坂「凄い人ね。ラウラさんって…」

黒子「頸動脈を片手で押さえつつ膝関節、肩を外す等人間業ではありませんわね…」

涙子「いや、あれは凄かったですよ。時間にして2分は経ってませんよ」

初春「だけど凄く可愛らしくて女の子らしいんですよ？凄く萌え要素の高い人なんですわね」

確かにかなり萌え要素の高い人だ。私も是非会ってみたい。で、これから会うのか。佐天さんが言うにはかなり変わり者らしいけど…私も結構変わり者の部類だからいいか…

御坂「待ち合わせの時間はいつなの？」

涙子「ラウラさんの学校が3時半にホームルームが終わるみたいなので4時に待ち合わせしてます」

初春「高校生でしたよぬ。大変なんでしょうか？」

黒子「高校は中学以上に成績に厳しいらしいですからね。わたくしやお姉様には関係ありませんが」

確かに私達の通う常盤平中学は社会に出れる人材を育成するのが目的の学校だ。だからかなりレベルの高い教育に、高位能力者が集いに集った学園都市屈指の名門中学校なのだ。と何自慢気に話してるんだろ…

初春「だけど佐天さん？なんで友達について詳しく教えてくれない

んですか？」

涙子「楽しみが減るでしょ初春。話だとかかなり多いみたいだし、面白い人達らしいよ」

御坂「だけど…私達で良いの？友達代表」

私と佐天さんは出会ってまだ少ししか経ってないのに大丈夫なのだろうか？

涙子「大丈夫ですよ！それにラウラさんに御坂さんと白井さんの話しちゃってますし。ここは私の顔を立てると思って！」

御坂「それなら良いけど…」

そんな他愛もない会話をしているとファミレスに来店を告げる音が鳴り響く。

涙子「時間的に…あ！」

佐天さんが手を大きく振って合図を出す。

どうやら来たみたいだ。

つか…なんで私がモノローグ担当なの？

第一話 B ファミレス会談 A (後書き)

士郎、ハヤテはレベル0ですが、能力開発は受けているので一応は能力はあります。しかしカズキはまだに発現されていません。よって能力無しです。

ハヤテは有るには有るが、どんな能力か解らない状況です。士郎は判明しています。

後、出演予定者は同級生にシャルロット・デュノア。桂ヒナギク。

先輩陣に阿良々木暦。戦場ヶ原ひたぎ。

小等部にイリアス・フォン・アインツベルン。

教師陣にロイ・マスタング。リザ・ホークアイ。

親陣に衛宮切嗣。アイリス・フォン・アインツベルン等々が予定されてます。

このキャラが見たいなどのご要望ありましたらドシドシ連絡してください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6668x/>

とある俺等の禁書目録

2011年12月24日01時51分発行